特別企画

崔承喜生誕100年

世界に舞った朝鮮の舞姫

朝鮮の舞踊家・崔承喜(1911-69)は1930年代から朝鮮や日本で絶大な人気を誇り、当時例のない世界公演を実現したスターだった。崔は日本の植民地下、朝鮮が世界地図から消え、民族文化の抹殺が刻々と進められた時代に流星のごとく現れた人々の希望だった。

(文・編集部)

18歳で舞踊研究所設立

「韓日併合条約」翌年の1911年11月24日、両班だった父・崔濬鉉と母・朴容子のもと、ソウルで4人きょうだいの末っ子に生まれた崔承喜。小学校を飛び級で卒業し、淑明女子高等普通学校に入学した後は音楽、舞踊の才能を現し成績もトップクラスだった。しかし、植民地化に伴い進められた土地調査事業によって、家勢は傾いていた。

そんなある日、15歳の崔は兄に誘われ日本の舞踊家・石井漠の公演を見にいく。崔が西洋舞踊を見たのは初めてのことで、ラフマニノフの曲にのせて「自由」を舞う石井の姿に、崔は「妓生」が酒の席でするものとしか考えられなかった舞踊のイメージを完全に覆された。

兄は妹を朝鮮を代表する舞踊家にしたいと考えていた。石井漠は、この日のことを次のように追憶している。「話をしているうちに、どうかして朝鮮からも、一人の優秀な舞踊家をつくり出すことは、両民族の融和のためばかりではなく、当時の朝鮮民族を世の中に浮かび上らせるためにも、決して意義のないことではないと考えた…」

石井に従って東京に向かった崔は、武蔵境の石井漠舞踊研究所に入所。崔承喜の稽古量は、他の研究生をはるかに凌ぐものだったという。27年10月には石井とともにソウルで初舞台を踏み「セレナーデ」を披露した。29年にはモダンダンスによる表現に満足できず18歳でソウルに崔承喜舞踊研究所を設立。30年2月に第1回創作舞踊発表会をソウルで開き、朝鮮の伝統舞踊「霊山舞」を初めて披露した。この公演をきっかけに崔承喜は、32年まで9回の発表会を催し、朝鮮各地を回った。

「私は、舞踊に貧しい朝鮮、しかも自分たちの舞踊の遺産さえも継承していくことのできない朝鮮に生まれた私は、郷土の芸術を新しく再建して行きたいと努力しています。一番苦しかったのは昭和4年(1929年)京城に帰った時の3年間です。…自分でさえ舞踊を放擲しなければならないかとさえ考えたことがある。涙を流してその場に、倒れてしまったことさえあるのですが、然し今となってはそれらの苦しみも皆、幸福な夢のようです」

崔は33年の春、再び日本へ向かう。崔はこの間、結婚し20歳で長女・安聖姫を授かり母となっていた。

朝鮮舞踊でトップに

石井のもとで再出発した崔承喜は34年9月の第1回新作舞踊発表会(日本青年館)に舞踊人生をかけていた。この日の公演で崔は「荒野をゆく」「放棄」「剣舞」「エヘヤ・ノアラ」「僧舞」「群舞」「霊山舞」「田舎の豊作」など朝鮮舞踊を次々に披露した。会場は3階まで満席で、ノーベル賞作家の川端康成らが観覧し、賞賛を送った。

崔は朝鮮舞踊の舞台化、という前人未到の仕事に取り組もうとしていた。

自分たちの舞踊の遺産さえも継承していくことのできない朝鮮…私は郷土の芸術を新しく再建していきたい

「エヘヤ・ノアラ」は自分の父が酔っ払った時に見せてくれた踊りの思い出に基づいており、「草笠童」は、幼い男子が年上の妻をめとる慣習を、「花郎の舞」は古代新羅の若武者を描いたものだ。素材は民俗、風習、宗教、歴史など幅広かった。

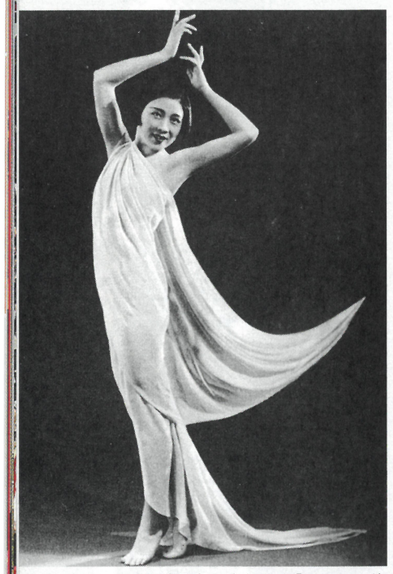
崔の古い弟子で、日本や朝鮮で生活をともにした舞踊家・張秋華さんが平壌でのインタビュー(『民族21』2003年6月号)で語っているが、崔の創作は民衆の中に脈々と伝わってきた舞踊を掘り起こす、という手法だった。「世間に特殊なカラク(가락、動作)を持つ老人がいるという噂を聞けば、呼び寄せては何日も捕まえては酒を飲ませ、その動作を学ぼうと相当の神経を使いました。人民の中でカラクを探し当てるのが先生の手法でした。使えるもの、使えないものを分け隔てることなく、すべてを吸収しようとしました。」

発表会を機に、崔の人気は一気に高まり、映画、広告、歌謡曲への登用など、人気はうなぎのぼりだった。35年には朝・日の著名人が名を連ねる後援会が生まれている。後援会のメンバーは独立運動家の呂運亨、東亜日報社長の宋鎮禹、日本人側はのちの内閣総理大臣・近衛文麿、音楽家の山田耕筰、作家の川端康成、菊池寛などそうそうたる面々だった。

コリアンダンサー、世界へ

崔承喜は1937年からは、アメリカからヨーロッパを駆け巡る公演旅行に出かける。日本が大陸侵略を本格化させ、その後方基地として朝鮮への収奪がますます深まっていた頃だ。この時の思いを崔は、「朝鮮のリズムを持って西洋とたたかう」と綴っている。

37年末からアメリカで公演した崔は、



崔承喜のデビュー作『セレナーデ』。1927年にソウルで初舞台を踏んだ

家族水入らずの時間。長女の安聖姫、夫の安漠とともに(日本)

公演のパンフレット。崔の公演は帝国劇場、歌舞伎座などで連日の盛況を博した

1941年のパンフレットから。海外公演を終え「世界の舞姫」と銘打たれている

「薩埵菩薩」。菩薩に材をとった踊りは手で印を結ぶ彫刻的な舞踊美が表現された（写真右）／海外公演先で（写真左）

39年1月からはパリを皮切りに欧州公演を打って出る。パリ第1回公演はパリで一番大きいサールプリエール劇場で開催され2700人が詰めかけたが、この時から「コリアンダンサー」と名乗るようになった。パリ公演には、ピカソ、コクトー、ロラン、のちの周恩来中国首相も訪れている。続いてスイス、イタリア、南ドイツ、オランダ、ブラジル、ウルグアイ、アルゼンチン、ペルー、チリ、コロンビア、メキシコと欧米で140回以上も公演を行い、39年12月に3年ぶりに日本へ帰った。崔は日本でもトップの座にあったが、この時期にこれほどの海外公演を実現させた舞踊家は例がない。

崔の才能は、よき師と伴侶―「二人の漠」によって開花された。舞踊の師・石井漠と伴侶の安漠である。プロレタリア作家として独立運動に身を投じていた安は、崔の舞踊を世に売り出そうという気概に満ち溢れ、プロデューサーとしての手腕に長けていた。海外渡航に先立って行われた渡欧告別公演では、「新羅宮女の舞」などの新作が発表されたが、そのパンフレットを見ても、英語やフランス語で崔承喜を紹介し、世界を意識している。欧州に行く前には「半島の舞姫」、欧米では「アジアの舞姫」「世界の舞姫」と紹介している。海外に出ていた3年間も、日本での人気が衰えないように原稿を送っていた。

朝鮮の舞姫に沸く同胞たち

日本に帰ってきてからも日本の古典舞踊を取り入れたり、日本軍の慰問公演に訪れた中国でも中国舞踊家と交流を深めるなど、新しいものを貪欲に取り入れた。すべて朝鮮舞踊を世界に通ずるものに磨きあげるためである。しかし彼女への評価は賛辞だけでなく、日本軍への慰安公演が親日のレッテルを貼られたり、崔自身や家族が警察の監視を受け、公演が中止になったこともある。日本と朝鮮が「支配―被支配」の関係にあった大きな時代の制約の中、崔は常に朝鮮舞踊を守り抜く方法を試行錯誤していた。その行動は親日的だった、と単純に切り捨てられるものではない。

崔の踊りを格別な思いをもって見守っていたのは、他でもない同胞たちだった。崔の最後の日本公演は44年1月27日から行われた帝国劇場での独演舞。その舞台も20日間満席という盛況ぶりだった。崔と親交のあった「婦人公論」記者の高嶋雄三郎は次のような言葉を残している。

「客席には正装をこらした朝鮮人が大勢集まって朝鮮語のはやし言葉で崔承喜さんを激励する声が場内を圧する。朝鮮人の観客は、貧しい人たちで、故郷に錦を飾るというように、一帳羅の晴れ着を精一杯着飾り、舞台に声をかけている。民族なるものを思いっ切り発散してるんですね。私はこの時、背すじに冷たいものを感じるほどのある種の民族的な威圧感からくる畏怖感すら感じられ、朝鮮民衆の底力を真のあたりにしました」

朝鮮人が朝鮮人として生きることを否定されていた時代、崔は、埋もれかかった朝鮮舞踊を民衆の中から掘り起こし、現代に通用する舞台芸術として完成させ、日本に、世界に羽ばたいていった。崔に備わっていたのは容姿と才能だけではない。あふれる情熱を持って世界に飛び立っていったのだった。

※参考「世紀の美人舞踊家・崔承喜」（高嶋雄三郎、鄭晧浩編著、エムティ出版、1994）

民族文化を守る意味、教えつづけ

同胞社会と崔承喜

石井漠研究所にて。後列左から2人目が任秋子さん（1950年代、写真提供も）

崔承喜生誕100年に際し、日本でも各地で多彩な催しが開かれ、多くの同胞が崔の作品世界に触れその存在を再確認した。「任秋子民族舞踊団特別公演」（2011年12月5日、東京・北とぴあ）、「崔承喜生誕100年記念公演―朝鮮舞踊祭典」（12月4日、広島ALSOKホール）では、崔の代表作が上演され観客を魅了した。また、12月21日に開催される「崔承喜讃フェスティバル」（東京・文京シビックホール）では、崔が朝鮮に帰国したあとに制作されたフィルムが初公開される予定だ。

在日舞踊界の草分けである任秋子さん（75、朝鮮の人民俳優）は、崔承喜の生誕100年を感謝の気持ちを込めて迎えたかったと話す。

崔に憧れて朝鮮舞踊を始めた任さんは、崔が師事した石井漠の舞踊研究所の門を叩き、崔と親睦の深かったという趙沢元より朝鮮舞踊を学んだ。任さんは、1957年、21歳という若さで舞踊研究所を設立するも、1世の舞踊家たちが一人二人と故郷へ帰る中、路頭に迷う日々だったと振り返る。

そんなとき、崔の著作「朝鮮民族舞踊基本」（1958）が朝鮮で刊行される。これが在日同胞舞踊界において道しるべとなり、朝鮮舞踊の基本として現在に至るまで連綿と受け継がれている。任さんをはじめとする中央芸術団（後の金剛山歌劇団）の舞踊家らは、崔の書籍を解読し、日本全国の朝鮮学校や同胞の集住する地域で伝習活動を行った。さらに1960年代に基本動作の映像教材、「朝鮮児童舞踊基本」（1964年、崔承喜著）が日本に入ってきてから、全国的に朝鮮舞踊基本の統一化が進んでいった。

1959年末から祖国への帰国船が往来するようになってからは、祖国の講師たちが同乗し、船上で直接指導を受けた。任さんは、「剣舞」「歓喜」「サダンの舞」など崔が創作した数々の名作たちを、崔の弟子たちから学んだという。

任さんは当時を振り返ってこう話す。「祖国から送られた崔の資料や作品のありがたみ、あのときの感動は今も忘れることができない。現在同胞社会で朝鮮舞踊が広く愛され、ウリハッキョで初級部から大学まで統一した教育を施せるのも、現代朝鮮舞踊を在日同胞に伝習してくれた崔承喜先生あってこそ」。

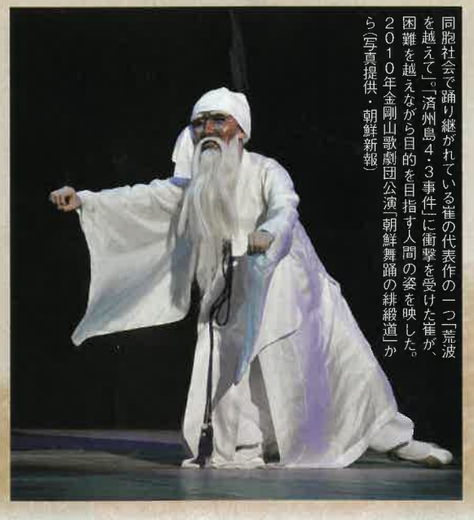
崔が確立した基本動作は、朝鮮学校の民族教育においても画期的な発展をもたらしたと高く評価するのは、朝鮮大学校で長年舞踊を教える朴貞順教授（58）。普及の契機となったのが、東京（1966年）と大阪（1967年）で行われた、「大音楽舞踊叙事詩公演」だと話す。約3000人の朝鮮学校児童・生徒たちが出演した公演の練習は3ヵ月におよび、この時作品とともに基本動作の指導も行われた。東京朝鮮中高級学校の卒業式でおなじみの群舞「青山里の野に豊作が来た」はこの叙事詩の一場面、崔の作品である。

また、日本初となる朝鮮の万寿台芸術団の公演（1973年）を皮切りに、祖国での講習が実現するなど、金剛山歌劇団はじめ在日同胞は祖国を行き来しながら、現在も崔の愛弟子から指導を受けている。

朝鮮舞踊が同胞社会に根付いて半世紀。在日同胞は伝統を守りながらも常に新たな表現を模索し創り上げてきた。

金剛山歌劇団で按舞家を務め、多数の作品を手がけてきた康秀奈さん（50、朝鮮の功勲俳優）は、「崔先生は人々の生活の中から民族的なものを探し、追究した。そこから学び、在日同胞たちが何に笑い、涙するのか、同胞たちの息吹を丹念に作品に込めていきたい」と話す。金剛山歌劇団では、一昨年に上演し、本格的に観たいとの声が高い「春香伝」を、新たに舞踊ミュージカル化し来年度に向け創作中だ。

多くの在日舞踊家が口をそろえるように、在日舞踊界のすべての源流は崔承喜にあるといっても過言ではないだろう。崔承喜の存在は、今日も故郷を遠く離れて異国の地に暮らす在日同胞たちに、民族文化を守り絶えず発展させていくことの意味を教えているのではないだろうか。



同胞社会で踊り継がれている崔の代表作の一つ「荒波を越えて」。「済州島4・3事件」に衝撃を受けた崔が、困難を越えながら目的を目指す人間の姿を映した。2010年金剛山歌劇団公演「朝鮮舞踊の絣緞道」から（写真提供・朝鮮新報）

平壌で生誕100年記念行事「沙道城の物語」が再演、崔承喜チュムチェの再教育も

取材・姜イルク（朝鮮新報平壌支局）

記念行事には、安東春文化相、リャン・チャンナム朝鮮舞踊家同盟委員長をはじめとする朝鮮の舞踊家、崔の遺族、海外からは在日朝鮮舞踊家代表団（団長＝文芸同中央の任秀香舞踊部長）、中国上海金星舞踊団の金星総監督が参加した。

初日の11月24日、人民文化宮殿では記念図書の発行式および研究討論会が行われた。討論会では、現代民族舞踊の基礎を築いた崔承喜の功績、舞踊創作の特徴について報告がなされ、崔承喜が創作した朝鮮舞踊の基本動作も披露された。また、25日に平壌サーカス劇場の大ホールで行われた交歓会では、崔が創作した代表的な舞踊「牧童と乙女」「チャンゴの舞」「扇の舞」「チェンガンの舞」が舞台に広がった。

また26日からは平壌大劇場で、1955年に初演された舞踊劇「沙道城の物語」（按舞＝金海春人民俳優）の再演が始まった（12月まで）。「沙道城の物語」は外敵から祖国を守った人民の姿を描いたもので、崔の代表作の一つ。今回、国立民族芸術団が3年かけてリメイクした。半世紀前の作品なので、当時の出演者たちを顧問に呼んで原作を生かすための作業に取り掛かったという。按舞を担当した同芸術団の金海春さん（72）は「原作のようにしっとりとした朝鮮の踊りの味に欠けている」と課題を語る。

朝鮮では近年、朝鮮舞踊における民族性を生かすための方途として「崔承喜チュムチェ（舎刈、踊り方）」を生かす教育が始まった。崔とともに舞踊活動に関わった初老の舞踊家たちが専門機関に赴き、教員や講師たちが2～3年の間に踊り方を習得するよう取り組んでいるという。

崔承喜舞踊研究所1期生たち。崔承喜は2列目の右から5番目（写真左）／国立民族芸術団によって56年ぶりに再演された舞踊劇「沙道城の物語」（写真下、撮影：朝鮮新報・文光善）

平壌では崔承喜の生誕100年を記念する行事が2011年11月24～26日に行われ、崔承喜が創作した舞踊劇や基本動作が再演された。朝鮮では近年、民族性を生かす方途の一つとして「崔承喜チュムチェ（舎刈）」を生かすための再教育が進んでいるという。

帰国後の崔承喜 舞踊家、教育者として偉業

1945年の祖国解放を北京で迎えた崔は、1946年6月に二人の子どもとともにソウルに入り、翌7月に平壌入りした。以降、崔承喜は国の強力なバックアップを受けながら、朝鮮舞踊の現代化、舞台化、そして教育者として人材育成に励んでいった。

現在の平壌・玉流館の場所に「崔承喜舞踊研究所」（のちの平壌音楽舞踊大学、現在の金元均名称平壌音楽大学）が設立されたのは46年9月7日のことで、半年を一期に30人の研究生を受け入れたという（関連記事）。

崔承喜は49年には朝鮮で初めての舞踊劇となる「半夜月成曲」を創作し、朝鮮戦争中も、モランボン地下劇場、中国、モンゴルで公演を続けた。そして、1958年には「朝鮮民族舞踊基本」（2巻、朝鮮芸術出版社）を出版する。同書は朝鮮舞踊の伝統と特徴、多様な表現方法、チャンダンと伴奏音楽など、朝鮮舞踊を総合的に体系化した朝鮮初の舞踊理論書で、出版から半世紀が過ぎた現在も関係者の中でバイブルとして生かされている。64年には「朝鮮児童舞踊基本」を著した。

崔は、朝鮮が創建10周年を迎えた58年には朝鮮初となる音楽舞踊叙事詩「誇らしいわが祖国」の総按舞を担当する大仕事をこなした。52年には朝鮮初の功勲俳優、55年には人民俳優の称号を授かり、最高人民会議代議員（1957）、朝鮮舞踊家同盟の初代委員長（1961）、など社会的な責任も負いながら舞踊界を担う重鎮として活動を続けていた。しかし晩年は政治的な波に巻き込まれ、その消息は67年で途切れ、一時はその業績も埋もれかけていた。

崔承喜の名誉が回復され、公に彼女の業績が再評価され始めたのは2002年頃からだ。

金日成主席は「金日成回顧録」第5巻（1994年）で、「崔承喜は朝鮮の民族舞踊の現代化に成功した。彼女は…民族的情緒が濃く優雅な踊りのリズムを一つひとつ探し出し、現代朝鮮民族舞踊発展の基礎作りに寄与した」と崔の功績を評価しており、03年2月には、愛国烈士陵に遺骨が安置された。

「舞踊への情熱、普通ではなかった」
弟子が見た崔承喜

洪貞花さん（人民俳優）

14歳の頃から崔承喜の指導を受けた、朝鮮の舞踊家・洪貞花さん（人民俳優、朝鮮舞踊家同盟中央委員会書記長）が朝鮮新報のインタビューに応じ、恩師の思い出を振り返った。

―弟子になった経緯を聞かせてほしい。

1954年8月「労働新聞」に初めて崔承喜舞踊研究所の研究生募集の記事が載り、14歳で試験を受けた。試験場には3000人もの人が集まっていた。先生は一次審査に合格した人を10人ずつ呼び、まず輪郭を見た後、踵から膝の関節、骨盤、肩、さらには指の爪まで触っていった。あまりに隅々まで調べるので皆緊張で体が震えていた。

続いて「チョウを捕る演技をしてみなさい」と出題し、個々人の動作を具体的に見ていった。結局30人が合格した。この時選ばれた学生たちが人民俳優、功勲俳優に育っていった。これが先生との初めての出会いだった。当時、先生は40歳を越えた頃でその美しさに圧倒されたものだ。

―どんな指導を受けたのか。

すばらしい舞踊家になるためには、たくさんの努力を積まなければならない、休むことなく、常に訓練を重ねた時に成功することができる、舞踊は一日を逃すと、10日後退するということを毎日のように語っていた。

指導を受ける時に学生が緊張して固まることがあったが、こんな時は、チョソンチュム（조선춤、朝鮮の踊り）は心を落ち着かせ、外形的に踊るのではなく、心の底から湧き出るものでなくてはならない、また、一番重要な呼吸の問題はすなわち心の問題だ、作品の世界にのめりこまなくてはならない、こうしてこそ、初めて優雅で美しい律動が生まれるということを日常的に教えてくれた。

―創作過程について話を聞かせてほしい。

試験合格後、平安南道大同郡にある小さな寺を改修した場所で学び始めた。先生の舞踊に対する情熱は普通ではなかった。先生は新入生を教えながら「沙道城の物語」を創作していた。練習場の窓にはガラスもなく厳しい寒さで、ブルブル震えながら夜半が過ぎるまで創作に没頭したものだ。作品が完成された後も先生は満足することなく、舞踊劇「清らかな空の下で」と「桂月香」の創作に取りかかった。

―崔先生の功績は朝鮮民族舞踊の基礎を作ったことだ。

金日成主席の課題を受け、先生は1957年10月に朝鮮民族舞踊動作を総合的に体系化し定立させた図書「朝鮮民族舞踊基本」を執筆、出版した。基礎なので、踊りを正確に踊る人たちが集められ、私も参加した。

基本動作は、歩く動作、腕の動作、膝を叩く動作、飛ぶ動作など15の動作があったのだが、一番しんどかったのが1番目の歩く動作だった。夜中の2時、3時でも「さあ、起きなさい」と訓練が始まったものだ。

私たちは崔承喜先生に基本動作を習いながら、舞踊家に育っていった。先生の踊りの真髄は基本動作にある。その踊りは重みがあり、美しく、造形美が強く、現代的でありながらも朝鮮の味と趣が宿っている。